九州生活福祉支援研究会研究論文集第 9 巻第 1 号（平成 27 年 9 月 30 日）松山郁夫

研究論文

保育を学ぶ学生が抱く幼児へのイメージ

松山　郁夫*

The Image of Early Childhood in University Students Learning Childcare

Ikuo MATSUYAMA

【要約】本研究では、保育を学ぶ学生が、幼児に対してどのようなイメージを抱いているのかを明らかにするため、保育を学ぶ学生が抱く幼児に対するイメージを、SD 法による 40 項目からなる質問紙票を用いて調査した。有効回答が得られた 113 名の回答について、各質問項目の平均値と標準偏差を算出するとともに因子分析を行った。その結果、保育を学ぶ学生は、幼児に対して、「態度に関すること」、「適応に関すること」、および「内面に関すること」の観点からイメージを抱いていること等が示唆された。

【キーワード】幼児、幼児のイメージ、保育を学ぶ学生　SD 法　因子分析

Ⅰ　はじめに

日本では、高度経済成長期以降、産業構造の変化に伴い、核家族化や地域間のコミュニティーの希薄化などが進行した。その結果、青年は子供や子育ての様子を見聞きする機会が少なくなっていると考えられ、もはや乳幼児の世話をしたことがない者が親になることが当たり前という状況になるのではないかと危惧される。このような社会環境の中で、将来、父親・母親になり、子供を育てる可能性のある青年は、子供や子育てをどのように捉えているのであろうか。大学生における子供のイメージについては、子供との接触体験が少ないほど子供の行動特性からくるイメージは否定的である（野村ら 2007）[1)]と指摘されている。

家庭科の保育学習において、対児感情の良好な群は、過去に子供との接触経験が多く、子供と触れあった体験も多いこと、また看護学においても、母性看護実習を経験することにより、児に対する回避感情は低下する（土居ら 1993）[2)]と言われている。これらのように、子供へのイメージは、子供との接触体験と関連させて論じる研究が多くなされている。

子供のイメージについては、保育領域の情意に関する評価用具として用いることができる（伊藤・武藤 1986）[3)]とされている。また、子供への親和が高いほど、子供に対してプラスのイメージをもっていることが明らかにされている（伊藤 2005）[4)]。各人が抱くイメージについては、生活の中で知覚に基づいて絶えず抱いているもので、イメージによって思考したり価値判断したりしている（水島 1983）[5)]。このように認知の枠組みを形成し、行動統制的役割を持っている（水島 1990）[6)]。

*佐賀大学文化教育学部

そのため、保育を学ぶ学生における幼児に対するイメージは、保育に関して学ぶ際にも、保育士や幼稚園教諭として保育を行う場合にも、幼児との接し方に影響を及ぼすと考えられる。

これらのことから、保育を学ぶ学生の場合、保育の仕事に就いた時に幼児への対応に否定的な影響を及ぼす可能性がある。したがって、保育を学ぶ学生が幼児に対してどのようなイメージを持っているのかを捉え、そのことを念頭に置いて保育者を養成する必要がある。このため、本研究の目的は、保育を学ぶ学生が抱く幼児に対するイメージがどのようなものなのかを明らかにすることとする。

Ⅱ　対象と方法

1. 調査方法と倫理的配慮

平成 26 年 6 月に、Ａ県Ｂ大学で保育を学ぶ学生に対して、回答への記入を無記名とした独自の質問紙票を配布し、その場で記入してもらい、回収する方法にて質問紙調査を実施した。その際、倫理的配慮として、回答への記入は無記名で行った。さらに、調査の主旨とデータの分析に際しては、すべて数値化することを口頭と書面で説明し、質問紙票への記入に関する承諾が得られた場合、回答してもらうこととした。

2. 調査項目と分析対象

調査対象である保育を学ぶ学生から得られた合計 121 名の回答のうち、全項目に回答した質問紙票を有効とした。有効回答率は 93.4%(113 名)であった。したがって、113 名からの有効回答を分析対象とした。

調査項目については学生のプロフィールに関する、性別、年齢、保育園での実習経験の有無、幼稚園での実習経験の有無である。以下は分析対象者のプロフィールである。

性別については男性 6 名(5.3%)、女性 107 名（94.7%)、年齢については 20 歳から 22 歳までで、平均 20.3 歳（標準偏差 0.47)、保育園での実習経験についてはあるが 52 名（46.0%)、ないが 61 名（54.0%)、幼稚園での実習経験についてはあるが 78 名（69.0%)、ないが 35 名（31.0%）であった。

3. 調査内容と分析方法

予備調査として保育を学ぶ大学生 10 名に、幼児に対するイメージを単語（形容詞や形容動詞等）によって複数記入してもらった。その対義語が確認できる「優しい―厳しい」「頼もしい―頼りない」等、40 対の形容詞対または形容動詞対を選定し、独自の幼児に対するイメージを問う質問紙票を作成した。

その際、Osgood（1957）らによって提唱された、情緒的意味の測定を目的とした手法である SD 法（semantic differential method）（Osgood, Suci, Tannenbaum, 1957）[7]・(岩下 1983)[8]・（神宮 1996)[9] を用い、それらの形容詞対および形容動詞対について、学生が抱く幼児に対するイメージがどれにより当てはまるのかを、「どちらでもない」を中位とする 7 件法によって回答してもらうようにした（図１)。

質問紙法における質問項目は、幼児に対するイメージを問う 40 項目とした。右端を 1 点、左端

を 7 点として、1 点から 7 点までを割り振ることにした。形容詞対および形容動詞対ごとに平均値と標準偏差を算出した。

次に、各質問項目について Promax 回転を伴う主因子法による因子分析を行った。また、因子分析によって得られた各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を求めた。その際、因子ごとの項目数が異なるため、算出された平均値を項目数で除したものを平均値として示した。さらに、各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を用いて、各因子間で平均値に差があるかどうかを検討するために、対応がある場合の一元配置分散分析を行った。なお、各因子の Cronbach のα係数を求め、各因子別、および全体としての内的一貫性を有するかどうかの検証も行った。

	非常に	かなり	どちらかと	どちらともいえない	どちらかと	かなり	非常に	
1. 優しい	+	---- +	---- +	---- +	---- +	---- +	---- +	厳しい
2. 明るい	+	---- +	---- +	---- +	---- +	---- +	---- +	暗い
3. 静かな	+	---- +	---- +	---- +	---- +	---- +	---- +	うるさい
4. 活発な	+	---- +	---- +	---- +	---- +	---- +	---- +	不活発な
……								
……								
40. おしゃべりな	+	---- +	---- +	---- +	---- +	---- +	---- +	無口な

図 1. 使用した独自の 40 対の形容詞対等による質問紙票の様式（一部抜粋）

Ⅲ　結　果

幼児に対するイメージについての各質問項目の平均値と標準偏差を算出した(表 1)。平均値の最小値は 3.76（「3. 静かな―うるさい」）で、最大値は 5.72（「11. 元気な―疲れた」）であった。全 40 項目中、平均点が 5 点以上の項目が 27 項目（67.5%）、4 点台が 11 項目（27.5%）、3 点台が 2 項目（5.0%）であった。

これら 40 項目について、Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は 0.88 であった。Bartlett の球面性検定では有意性が認められた（近似カイ 2 乗値 3459.28　$p<.01$）。このため、40 項目については因子分析を行うのに適していると判断した。

これら 40 項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は 15.91、3.46、2.39、1.85、1.36、1.17……というものであった。スクリープロットの結果も考慮すると、3 因子構造が妥当であると考えられた。そこで、3 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。

その後、3 因子の因子負荷量が全て 0.4 以上になるまで主因子法・Promax 回転による因子分析を

繰り返した。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった 9 項目が除外された。Promax 回転後の因子パターンは表 2 の通りであった。回転前の 3 因子で 31 項目の全分散を説明する割合は 60.36%であった。なお、これら 31 項目について、Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は 0.92 であった。また、Bartlett の球面性検定では有意性が認められた（近似カイ 2 乗値 2607.48　$p<.01$）。

各因子の Cronbach のα係数を求めたところ、第 1 因子に関してはα＝0.95、第 2 因子に関してはα＝0.91、第 3 因子に関してはα＝0.62 であり、全項目でα＝0.95 との値を示したことから、各因子別に見ても、全体としても、内的一貫性を有すると判断された。

第 1 因子は、「14. にぎやかな―さびしい」、「15. 陽気な―陰気な」、「10. かわいらしい―にくらしい」、「28. 面白い―つまらない」、「11. 元気な―疲れた」など、主として幼児の態度から抱くイメージを内容としていたため、「態度に関すること」と名づけた。

第 2 因子は、「19. 安定した―不安定な」、「5. 頼もしい―頼りない」、「8. 落ち着いた―落ち着きのない」、「34. きちんとした―だらしのない」、など、主として幼児の内面的なことに関して抱くイメージを内容としていたため、「内面に関すること」と名づけた。

第 3 因子は、「23. 敏感な―鈍感な」、「25. 慎重な―軽率な」、「39. 鋭い―鈍い」で、主として幼児の社会適応に関するイメージを内容としていたため、「適応に関すること」と名づけた。

因子別の平均値（標準偏差）は、第 1 因子 5.27（SD：0.81）、第 2 因子 4.89（SD：0.71）、第 3 因子 4.47（SD：0.61）であった。

各因子間の平均値について対応がある場合の一元配置分散分析を行った結果、3 因子の平均値間には有意差が認められた（表 3）。さらに、各因子の平均値に対して多重比較を行った結果、第 1 因子と第 2 因子間、第 1 因子と第 3 因子間、および第 2 因子と第 3 因子間の各々に有意差が認められた。このため、保育を学ぶ学生は、幼児に対するイメージについて、第 1 因子「態度に関すること」、第 2 因子「内面に関すること」、第 3 因子「適応に関すること」の順に関心を向けていると示唆された（表 4）。

表 1. 幼児に対するイメージについての質問項目における平均値と標準偏差

項　目	平均値	標準偏差
1. 優しい―厳しい	5.10	.982
2. 明るい―暗い	5.45	1.096
3. 静かな―うるさい	3.76	.919
4. 活発な―不活発な	5.40	1.161
5. 頼もしい―頼りない	4.71	1.015
6. 愉快な―不愉快な	5.23	1.009
7. たくましい―弱々しい	5.15	1.063
8. 落ち着いた―落ち着きのない	4.35	1.043
9. 思いやりのある―わがままな	4.91	1.106
10. かわいらしい―にくらしい	5.07	1.201
11. 元気な―疲れた	5.72	1.073
12. 積極的な―消極的な	5.18	1.071

13. 暖かい―冷たい	5.22	.933
14. にぎやかな―さびしい	5.33	1.039
15. 陽気な―陰気な	5.32	1.002
16. 強い―弱い	4.77	.991
17. 気持ちのよい―気持ちのわるい	5.08	1.053
18. 親切な―不親切な	5.00	.916
19. 安定した―不安定な	5.13	1.048
20. まじめな―不真面目な	4.60	.861
21. 素直な―強情な	5.18	1.104
22. 自由な―不自由な	5.34	1.074
23. 敏感な―鈍感な	4.65	.933
24. 社交的な―非社交的な	5.06	1.029
25. 慎重な―軽率な	4.33	.829
26. のんびりした―こせこせした	4.41	.775
27. 親しみやすい―親しみにくい	5.27	1.037
28. 面白い―つまらない	5.13	1.073
29. 意欲的な―無気力な	5.23	1.035
30. 外向的な―内向的な	5.02	1.026
31. 感じのよい―感じのわるい	5.23	1.000
32. 充実した―空虚な	5.10	1.077
33. 好きな―嫌いな	5.12	1.108
34. きちんとした―だらしのない	4.89	.900
35. 良い―悪い	5.09	.987
36. 幸福な―不幸な	5.29	1.050
37. 複雑な―単純な	3.87	.977
38. 理性的な―感情的な	4.03	1.022
39. 鋭い―鈍い	4.30	.895
40. おしゃべりな―無口な	5.05	1.051

表 2. 幼児に対するイメージについての質問項目における因子分析の結果

項　目	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子
第 1 因子「態度に関すること」			
14. にぎやかな―さびしい	.905	−.030	−.067
15. 陽気な―陰気な	.868	−.124	.025
10. かわいらしい―にくらしい	.832	−.333	−.013
28. 面白い―つまらない	.828	−.077	.159
11. 元気な―疲れた	.826	.129	−.238

6. 愉快な―不愉快な	.819	.093	-.150
2. 明るい―暗い	.751	.150	-.252
22. 自由な―不自由な	.714	-.169	.314
40. おしゃべりな―無口な	.711	-.074	.051
4. 活発な―不活発な	.662	.140	.361
21. 素直な―強情な	.636	.022	.218
27. 親しみやすい―親しみにくい	.581	.232	.146
12. 積極的な―消極的な	.575	.283	.037
13. 暖かい―冷たい	.503	.328	.127
29. 意欲的な―無気力な	.493	.277	.217
31. 感じのよい―感じのわるい	.479	.365	.077
第 2 因子「内面に関すること」			
19. 安定した―不安定な	-.292	.926	.083
5. 頼もしい―頼りない	-.001	.767	-.272
8. 落ち着いた―落ち着きのない	-.558	.759	-.057
34. きちんとした―だらしのない	-.014	.714	.140
24. 社交的な―非社交的な	.153	.649	.071
30. 外向的な―内向的な	.189	.612	.121
18. 親切な―不親切な	.241	.590	.010
9. 思いやりのある―わがままな	.160	.577	-.125
17. 気持ちのよい―気持ちのわるい	.179	.528	.159
16. 強い―弱い	.155	.521	.000
7. たくましい―弱々しい	.355	.509	-.222
20. まじめな―不真面目な	-.014	.496	.414
第 3 因子「適応に関すること」			
23. 敏感な―鈍感な	.187	-.206	.665
25. 慎重な―軽率な	-.198	.188	.538
39. 鋭い―鈍い	.068	-.017	.443

表3. 幼児に対するイメージについての各因子における分散分析の結果

区　　分	平方和	自由度	平均平方	F値
支　援	36.216	2	18.108	66.849*
被調査者	111.533	112		
誤　差	60.677	224	.271	
全　体	222.681	338		

*p<.05

表4. 幼児に対するイメージについての多重比較による各因子の平均値の差

	第2因子「内面に関すること」	第3因子「適応に関すること」
第1因子「態度に関すること」	.381*	.800*
第2因子「内面に関すること」		.419*

*p<.05

Ⅳ 考 察

幼児に対するイメージについての各質問項目において、平均点が 5 点以上の項目が 27 項目（67.5%）、4 点台が 11 項目（27.5%）、3 点台が 2 項目（5.0%）であった。好意的な見方をしている傾向があると言える。

幼児が主体的に活動する場合、異なる個性を持った幼児が自発的に自分の活動を作っていくことになり、その結果多様な活動が出現することになる。保育者は幼児の多様性、時には予想もしない活動を受け入れながら、全体としてのまとまりを作っていかなければならない(安藤則夫・馬場彩果・植草一世ら 2015)[10]。保育者は幼児の行動や態度に対応しながら保育を行うことになる。このため、第 1 因子「態度に関すること」は、幼児における他者との関わり方やコミュニケーションの仕方に対するイメージを表しているものと考えられる。

看護系学生がとらえる乳幼児のイメージは、肯定的・否定的側面とともに外見的・内面的イメージの両面をとらえる傾向がある。非看護系学生がとらえるイメージは、肯定的で外見的イメージを優先する傾向がある。保育系学生がとらえるイメージは、内面的イメージを優先し養護の必要な庇護する存在という傾向がある（細野・市川・上野 2009）[11]。保育を学ぶ学生は、それ以外の領域を学ぶ学生よりも乳幼児の内面的イメージを重視し、守るべき存在と捉えている。保育者には幼児の内面を理解するように心がけながら、信頼関係を構築し、保育を行うことが求められる。したがって、第 2 因子「内面に関すること」は、保育者との信頼関係のなかで、健やかに成長する幼児の内面に対するイメージを表していると言えよう。

幼児の社会性の発達において、養育者との関係のみならず、同年齢の仲間との関わりも重視する集団社会化説によれば、幼児は 18 ケ月以降に仲間の行動に応じた相互作用が展開されるようになる（Harris, 1995）[12]。この場合、玩具などのモノを介したやりとりが多く、相手とのやり取りそれ自体に関心があるわけではない（Brownell, Brown, 1992）[13]。20 ケ月から 24 ヶ月の間に、見知らぬ幼児とも自発的な協同遊びができるようになる（Davis, Didow, 1989）[14]。子どもの社会性の発達には、母子関係を軸とした大人との安定した関係の形成だけでなく、仲間集団への参加も重視すべきである。このような発達を遂げながら、社会適応がなされていく。したがって、第 3 因子「適応に関すること」は、幼児の社会適応のあり方に対して抱くイメージを表していると判断される。

保育を学ぶ学生は、幼児に対して「純粋な、かわいい、やわらかい、あたたかい、自由な存在」というイメージをもち、それは学年が上がり、よりはっきりとしたものになっていくと指摘されている（小沢 2012）[15]。保育を学ぶ学生は、幼児を自由で純粋無垢なイメージで捉えていることが窺える。これを前提にして幼児の内面に目が向き、その社会適応を捉えようとする。このため、第 1 因子「態度に関すること」、第 2 因子「内面に関すること」、第 3 因子「適応に関すること」の順に関心を向けることになる推察される。

幼児に対する保育者志望の学生に内在化する肯定的なイメージや幼児の特性を肯定的に把握する視点は、保育者志望学生の内発的エネルギーとなっていると指摘されている（小沢 2012）[15]。このため、保育のあり方を熟慮し、保育観を形成していく保育者養成教育のために、保育を学ぶ学生における幼児に対するイメージを捉えておく必要があると考えられる。

Ⅴ　結　論

保育を学ぶ学生が抱く幼児に対するイメージがどのようなものなのかを明らかにするために、独自に作成した質問紙票を用いた調査を行った。その結果、保育を学ぶ学生が抱く幼児に対するイメージについては、全般的に好意的であること、および「態度に関すること」、「内面に関すること」、「適応に関すること」の３つの視点があり、この順に関心を向けていることが示唆された。保育観を形成していく保育者養成教育のために、保育を学ぶ学生における幼児に対するイメージを捉える必要があると考察された。

謝　辞

本調査に協力していただいた皆様に感謝致します。

引用文献

1)野村幸子・河上智香・長谷典子・藤原千恵子　子どもとの接触体験からみた看護学生の子どもイメージ　県立広島大学保健福祉学部誌　7(1)　169-180　2007

2)土居久子・大槻優子　母性看護実習と母性意識の変容―花沢の対児感情評定尺度・母性理念質問紙を用い実習前後の対児感情・母性意識の測定から―　順天堂医療短期大学紀要　4　50-58　1993

3)武藤八重子・伊藤葉子　保育領域における情意の指導と評価：加齢と指導の影響　日本家庭科教育学会　31(1) 45-52　1988

4)伊藤葉子　中・高校生の「子どものイメージ」の発達　千葉大学教育学部研究紀要　53　85-90　2005

5)水島恵一　イメージとは―総論―　教育と医学　31(1)　4-12　1983

6)水島恵一　イメージ　心理学９　41-45　325-327　大日本図書　1990

7)Osgood, C.E., Suci, G.J., Tannenbaum, P.H.　The measurement of meaning. University of Illinois Press, Urbana 1957

8)岩下豊彦　SD 法によるイメージの測定　川島書店　1983

9)神宮英夫　印象測定の心理学　川島書店　1996

10)安藤則夫・馬場彩果・植草一世・加藤 悦子・栗原ひとみ　保育者を目指す学生の柔軟な対応力 ： 幼児の多様で想定外の行動に対処できる心構えの形成　植草学園大学研究紀要　7　69-77　2015

11)細野恵子・市川正人・上野美代子　看護系学生と非看護系学生および保育系学生の乳幼児に対するイメージの比較　名寄市立大学紀要　3　79-86　2009

12)Haris, J. R. The nurture assumption ; Why children turn out the way they do.　New　York. Free Press 1998

13)Brownell, C. A . & Brown, E.　Peers and play in infant sand toddlers, Van Hasselt, V. B. Hersen, M. (Eds)　Handbook of social development : A lifespan perspective　New　York.　Plenum

Press 183-200 1992
14)Eckerman, C. O.　Davis, C. C.　Didow, S. M.　Toddlers’ emerging ways of achieving social coordinations with a peer. Child　Development　60(2)　440-453　1989
15)小沢日美子　幼児理解と子ども観・保育者観－保育者志望学生による調査から－　生涯学習研究センター紀要　17　7-23　2012